みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Soviet anthropology in the institutional contexts : Influences on the surrounding fields : Cultural anthropology and socialism in the Slovak Republic : The influences of political ideology

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神原, ゆうこ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001249

高倉浩樹・佐々木史郎編『ポスト社会主義人類学の射程』
国立民族学博物館調査報告　78:165-194(2008)

スロヴァキアにおける文化人類学と社会主義
――政治的イデオロギーの作用に関連して――

神原　ゆうこ
東京大学大学院・日本学術振興会特別研究員

現在のスロヴァキアにおいて，社会主義時代の文化人類学についての評価は概して否定的である。しかし，スロヴァキアの文化人類学は，社会主義時代に大きく発展しており，この時代を簡単に切り離すことはできないはずである。本稿では，社会主義時代の文化人類学研究が，その政治性を超えて，現在の人類学に与えた影響とその連続性について考察することを目的とする。

社会主義時代の文化人類学的研究は，確かに当時の政治的イデオロギーによってその発展が拘束されていた。そのため，1989年以降，スロヴァキアの文化人類学が社会主義時代の影響から脱し，欧米の文化人類学へと研究の方針を移行する際，文化人類学者の間には混乱が生じた。しかし一方で，この移行において，ひとつの鍵となったのは，社会主義時代の人類学に求められていた「現在」を研究する視点でもあったと考えられる。文化人類学を取り巻く政治性は，社会主義時代だけでなく，現在にも存在しており，ポスト社会主義地域の研究においては，現地の人類学者には自明である社会主義時代を客観視する作業が必要である。

1 序
1.1 問題の背景
1.2 文化人類学の境界の曖昧さ
2 民俗学が形成された時代
2.1 起源としての文化復興運動
2.2 チェコとスロヴァキアの微差
3 社会主義時代における文化人類学的問い
3.1 社会主義的思考への転換
3.2 理念と実践の差
3.2.1 マルクス主義と「現在」をみる視点
3.2.2 イデオロギーの範囲内における民俗学の展開
4 ポスト社会主義時代における社会主義時代の遺産
4.1 方針の転換と新たな政治性の存在
4.2 ポスト社会主義となるために
5 総括と考察

＊キーワード：社会主義，政治的イデオロギー，ポスト社会主義，文化人類学

1 序

1.1 問題の背景

おそらく旧社会主義国に共通する現象だと考えられるが，社会主義時代に執筆された文化人類学関連の研究論文を読む際には，執筆された時期の文脈に配慮してその論文を理解する必要がある。社会主義時代の研究活動は，当時の政治的なイデオロギーに縛ら

れがちであったため，同じ国であっても，その研究のあり方は現在の研究者によるものとは異なっている。また，西側の研究者との学問的な交流も限られていたため，現在理解されている文化人類学の学説史上に当時の研究論文を位置づけることも難しい。むしろ，当時の文化人類学に関連する学問の世界は，社会主義国の内部で閉ざされた特殊な空間のなかに位置していたと考えられ，当時の研究論文をより深く理解するためには，その「特殊な空間」を理解する必要がある。

とはいえ，旧社会主義各国においても，狭義の「文化人類学」や民族学，民俗学等を取り巻く歴史的文脈は少しずつ異なるものであり，単純に旧社会主義国という枠組みを用いて論じることは軽率である。本稿では，まず議論をスロヴァキア共和国に限定した上で，スロヴァキア人研究者による現地の研究を考察の対象とし，そこから社会主義国の学問的空間に共通するであろう「特殊さ」，すなわち社会主義時代の人類学に対する政治的イデオロギーの作用について考察したい。スロヴァキアを対象とした考察を行うことで，社会主義時代の文化人類学的研究の中心であったソビエト連邦・ロシアではなく，衛星国として，半強制的にソビエト連邦における文化人類学的研究，すなわち「ソビエト民族学」[1] というディシプリンを受け入れざるを得なかった国における文化人類学のあり方を問うことが可能となる。

加えて，この事例はポスト社会主義圏の人類学という枠組みだけでなく，1989年以降形成されつつある新しい形のヨーロッパの人類学という枠組みに位置づけることも可能である。ヨーロッパにおける文化人類学が研究の対象とする「ヨーロッパ」は，その定義が未だ明確でなく，内部にも多様性を抱えた概念である（Goddard 1994; O'Dowd 1996）。特にかつての西と東の境界は，ひとつの社会的，文化的，経済的大きな亀裂として認識されており（Kideckel 1998: 134），そこにおける文化人類学のあり方も異なっている。しかしながら，それを踏まえ，その差異を認識することで多様性のある「ヨーロッパ」の人類学を構築しようとする動きもみられる（Vermeulen 1995; Dracklé 2003）。本稿は，その多様性の１つを描き出し，かつ社会主義からの転換の過程を記述した点で，多様性が存在しつつも，１つの方向に統合を目指しているヨーロッパ人類学の現在の状況を提示することを試みている。

なお，社会主義時代の終焉をひとつの研究史上の区切りをすることは，現地のスロヴァキア人類学者の間でも共通して了解されている。1990年代は，スロヴァキアの文化人類学雑誌に今後の文化人類学の方向性を模索する論考が繰り返し掲載された時期であり，学問の潮流の大きな転換点であったことを，そこから読み取ることができる。また，2000年代に入ってからの90年代を振り返ったスロヴァキアにおける学説史の検討においても，90年代は（西）欧米の人類学の文化人類学の理論や方法論の影響を受け，社会主義時代とは研究の傾向が大きく転換したと指摘されている（Kiliánová 2002; Šrámková 2003）。

基本的にこれらの論考の多くは，社会主義時代の人類学への批判を土台としており，1990年代は社会主義時代の人類学からの脱却が試みられた時期だといえる。ただし，そこには，それまでの人類学を無視する傾向も同時に存在していた。例えば，1995年に大学の講義の教材として作成された，『民族学入門』（*Úvod do Etnologie*）（Horváthová 1995）では，スロヴァキア民族学の歴史について，社会主義時代のことは，ほとんど触れられていない[2)]。同様に1995年に発行された文化人類学事典[3)]（Botík 1995a；1995b）においても，社会主義時代の研究論文においては，しばしば見かけられたマルクス主義に関係する用語は掲載されていない[4)]。

もちろん，それは単純に社会主義時代そのものをなかったこととして，スロヴァキアの文化人類学の研究が進められていることを意味するのではない。社会主義時代をひとつの特殊な時代として捉え，その「遺産」に関する研究は，現地の人類学者の間においても進められている。折しも，2006年にはスロヴァキアの文化人類学雑誌の１つである『民族学会報』（*Etnologické rozpravy*）において「民族誌と社会主義」（Etnografia a Socializmu）という題目で特集が組まれ，農業の集団化，社会主義時代の建設作業ボランティアや学校行事など，社会主義時代に特有な現象をテーマとした論文が多数掲載された（Ďurišová 2006；Kadlečík 2006；Nováková 2006；Segľová 2006）。また，この特集に限らず，とりわけ社会主義前後での価値変化に関する問題や集団農場に関連する諸問題については，以前からも研究が進められてきており（Danglová 1992, 2003, 2006；Slavkovský 1993a；Ratica 1991, 1992），これらのテーマは，社会主義から資本主義への移行期社会研究として外国の文化人類学者からの関心も集めていた[5)]。

一方で，社会主義の「遺産」の１つをトピックとした研究でなく，社会主義時代の人類学自体の評価について検討した論文については，1989年以降，現在に至るまでほとんどなく，社会主義時代の人類学が，現在の人類学に与えた影響についての検討は不十分である。もちろん，社会主義時代に，場合によってはアカデミックな世界から追放される危機感を抱いていた研究者が，社会主義時代の研究に学問的な蓄積などないと考えることについて理解はできる。しかしながら，スロヴァキアにおける文化人類学が，独自の教育機関を持ち，学問としての発展を遂げたのは[6)]，社会主義時代である。その間の人類学が政治的なイデオロギーに支配されていたとはいえ，社会主義時代の人類学と，現在の人類学を切り離すことは難しいのではないだろうか。特に社会主義圏以外の研究者にとっては，また社会主義時代という共通体験を持たない若い研究者にとっても，社会主義時代の蓄積を無視する風潮に同調することは，現地における人類学の無理解につながる危険性がある。

人類学の発展は社会主義国に限らず，そもそも多分に政治的である。スロヴァキアの文化人類学も，社会主義時代のみに限らず，その初期は民族復興運動，そして現在もポスト社会主義における政治性の中に存在している（神原 2004：24-25）。当時も現在も

政治性の中にあることを了解した上で，積極的な意味を敢えて考察することは可能ではないだろうか。そのために，以降の章では，多少概説的にはなるが，政治的な文脈に注目しつつ，社会主義時代以前からのスロヴァキアの文化人類学の主な議論の流れを追っていく。その議論の流れを押さえた上で，社会主義時代の人類学の性格を明らかにし，本稿の最終的な目的としては，社会主義時代の文化人類学研究，および民族誌が，その政治性を超えて，現在の人類学に与えた影響とその連続性を考察することを目指す。このことは，社会主義時代の民族誌の行間に潜む，記述対象となる現象の背後にある大きな書き手側の政治的文脈を理解することにつながる。それによって，これまで軽視されがちであった当時の民族誌に，歴史的資料以上の価値を見出すことが可能となると考えられる。

1.2 文化人類学の境界の曖昧さ

ここまで，便宜的に文化人類学という単語を用いてきたが，スロヴァキアにおいて文化人類学に関連する学問を指す言葉は複数存在する。これらは，現在スロヴァキアで「文化人類学」と呼ばれる学問の基礎とされている点では，文化人類学の範疇に入ると考えられるが，現在の「文化人類学」と，その起源にあたる学問は同じものではない。この1.2では，以降の議論を明解にするため，スロヴァキア文化人類学に関連する学問分野名を整理しておく。

スロヴァキアにおいて「文化人類学」に当たる単語は，クルトゥルナー・アントロポローギア（kultúrna antropológia）であるが，この単語は1990年代後半以降から徐々に使用され始めたばかりである。19世紀から1980年代まで，村落地域の人々習慣や舞踊，歌などの文化に関する学問はナーロドピス（národopis）と呼ばれていた。英語のフォークロア（folklore）に似たフォルクロール（folklór）という単語もあるが，こちらは民俗舞踊と民謡や口頭伝承のみを意味する単語である。ナーロドピスについて，スロヴァキアの文化人類学事典では民族（俗）誌学＝エトノグラフィア（etnografia）[7] と民俗芸能学＝フォルクロリスティカ（folkloristika）を包含する学問と記されており（Botík 1995a：396），ナーロドピスはこの２つの分野を統合する名称であるとされている。社会主義時代より前とその後で，学問の方向性や性格が変容することはあっても，社会主義時代が終わるまでは，文化人類学に近い学問を指す名称はナーロドピスのみであった。ナーロドピスが使用されてきた時代のスロヴァキアの文化人類学の対象は基本的に自文化であり，本稿においては，他の単語と区別するために必要に応じてナーロドピスを民俗学と訳す。

1989年以降，学問に対する政治的な規制がなくなり，「西側」の文化人類学の影響を大きく受けるようになると，スロヴァキアにおける文化人類学的研究もさまざまな方向に広がりをみせ，学問名称自体も揺らぎはじめた。それまでの文化人類学的研究の中心

であった民俗学研究所は1994年に民族学研究所に改称し（Michálek 1998：124），1968年に設置されたコメニウス大学民族（俗）誌学・民俗芸能学科は現在，民族学・文化人類学科に名称を変更している。ここで民族学と訳したもともとのスロヴァキア語の単語は，ナーロドピスと入れ替わるように使用され始めたエトノローギア（etnológia）である。先に挙げた文化人類学事典においても，エトノローギアは「文化や文明の歴史，文化間関係についての研究（Botík 1995a：129）」，直訳で「文化人類学」を意味するクルトゥルナー・アントロポローギアは「人々の社会やコミュニティの文化についての，歴史的および同時代的始点からの研究（Botík 1995a：290）」と区別されている。前者はドイツ語圏，スカンディナヴィア諸国における民族学に近い形の文化人類学からの影響，後者はアングロサクソン系の異文化研究を源流とする文化人類学からの影響を受けた概念であり，この２つのどちらに沿って民俗学からの新たな方向へ展開するかの議論も，一時期盛んに試みられた（Kiliánová 2002）。結果的には，1989年以降，最初は民族学という単語が広く使用されたが，1990年代後半から2000年代にかけて，民族学は「文化人類学」に置き換えられた。

これらの変遷を経て，現在では，1989年以前の民俗学の理論や研究手法から脱却し，欧米の文化人類学と同じ理論の潮流に立った研究も行われ始めている。しかし，全ての研究者が完全に切り替わっているとはいい難い。欧米の文化人類学にアクセスする言語や教育環境の壁も依然として存在しており，外部からの影響もかつての民俗学の土壌で受け止められていることを考慮にいれる必要がある。スロヴァキアの「文化人類学」にしても，1989年以降の輸入学問ではなく，それ以前の土台の上に立っていると考えるのが妥当である。そもそも欧米においても文化人類学は，多少なりとも，地域によるバリエーションを持って発展してきたのであるから，社会主義以前を否定するのではなく，旧社会主義国という地域によるバリエーションも想定することは可能ではないだろうか。以降の節では，スロヴァキア人類学の歴史的な展開を辿るが，それはこの可能性について考察することを目的とする。第２節ではまず，社会主義を受け入れた時代の思想的な転換を理解するため土台として，社会主義時代以前の状況について整理したい。

2 民俗学が形成された時代

2.1 起源としての文化復興運動

スロヴァキアにおける文化人類学は，18世紀末から19世紀にかけてのスロヴァキア民族復興運動にその起源を遡ることができる。この時期に民族運動の一環として，自らの文化の拠りどころを確立するため，スロヴァキア語の民話や民謡の収集活動が行われ，これが民俗学の原型を形成した。1863年にはスロヴァキア民族文化団体であるマティツァ・スロヴェンスカー（Matica Slovenská）が成立し，このとき民俗学は地理学と

もにこの組織内部の研究部会の１つとして存在していたが[8]（Winkler 2003：86），これが初めての全スロヴァキア的な民俗学の組織の設立となった（Michálek 1998：115）。スロヴァキアを支配していたハンガリー政府の方針により，マティツァ・スロヴェンスカーは1875年に閉鎖されるが，マティツァ・スロヴェンスカーの遺産を引き継ぐ形で博物館，および関連団体（Muzeálna slovenská spoločnosť）が成立し，その活動の一部として民俗学的活動が進められた（Michálek 1998：117）。1896年にはその成果を発表する雑誌『スロヴァキア博物館論集』（*Sborník Muzeálnej slovenskej spoločnosti*，さらに1898年にも同様の雑誌『スロヴァキア博物館雑誌』（*Časopis Muzeálnej slovenskej spoločnosti*）が創刊された（Michálek 1998：81–91；Ondrejka 2003：24）。ただし，これらの雑誌は，民俗学関係の論文の掲載数は多いものの，純粋な民俗学雑誌ではなく，「博物館所蔵物，民族（俗）誌，地誌，自然科学，考古学，歴史学などスロヴァキアの人々の過去と現在に関するもの」[9]についての論文を掲載する雑誌であった[10]。しかしながら，この時期のこれらの活動によって，人々の無形・有形の文化に対しての興味はひろがり，後に民族（俗）誌学は他の研究分野を補足するものでなく，独立した研究分野として成立するようになった（Urbancová 1987：219）という点で，その意義は大きいといえる。このように，スロヴァキアの民俗学は，民族の文化復興運動に由来した文化の収集活動を中心に発展を始めた。

一方で，当時は中欧諸国全体でも民族運動が隆盛を極めた時期であり，周辺の国々においても同様に民族の文化への興味は高まっていた。したがって，このような周辺諸国における同様の活動も，スロヴァキアの民俗学に影響を与えていた。当時スロヴァキアはハンガリーの支配下にあったが，そのハンガリー国立博物館におけるスロヴァキアの展示は，スロヴァキアの民俗学的活動に対抗心を引き出す形で影響を与えた（Polonec 1943：65）。また，後にチェコスロヴァキアが成立することから想定できるとおり，スロヴァキアの民族運動は，チェコにおける同種の活動と密接に関連しており，民俗学的活動においても，チェコの民俗学者からの大きな影響を受けている。チェコでは，スロヴァキアよりも先に民俗学が学問として体制を整え[11]，彼らも言語や習慣など文化的な親和性が高いスロヴァキアで，民謡の収集や習慣等についての調査を行っていた（Černik 1915：254；Urbancová 1979b）。それらの成果の一部は，チェコスロヴァキアが成立する以前から，プラハで刊行されていたチェコスロヴァキア民俗学会の雑誌である『チェコスロヴァキア民俗学論集』（*Národopisný sborník Československý*），および『チェコスロヴァキア民俗学紀要』（*Národopisný věstník Československý*）に論文が掲載された[12]。

【表１】 年表

	（ハンガリー王国による支配時代）
1863	マティツァ・スロヴェンスカー（Matica Slovenská）成立
1867	オーストリア＝ハンガリー二重帝国の成立、国内のハンガリー化が政策として進められる。
1875	マチィツァ・スロヴェンスカー閉鎖
1891	『チェコ民衆』（*Český lid*）創刊
1896	『スロヴァキア博物館論集』（*Sborník Muzeálnej slovenskej spoločnosti*）創刊（-1951、『スロヴァキア民族博物館論集』に名称変更して現在まで続く）
1897	『チェコスロヴァキア民俗学論集』（*Národopisný sborník Československý*）創刊（-1905）
1898	『スロヴァキア博物館雑誌』（*Časopis Muzeálnej slovenskej spoločnosti*）創刊（-1950）
1906	『チェコスロヴァキア民俗学紀要』（*Národopisný věstník Československý*）創刊（-1956, 1966-1992）
1918	チェコスロヴァキア共和国成立
1919	マティツァ・スロヴェンスカー復活
1921	コメニウス大学で民俗学概説の講義が始まる。
1939	チェコスロヴァキア解体、スロヴァキア共和国独立
	『民俗学論集』（*Národopisný Sborník*）創刊（-1952, 1998-）
1945	第２次世界大戦終了
1946	スロヴァキア科学アカデミー民俗学研究所設立
1948	共産党がチェコスロヴァキア共和国の政権に就く
1949	スロヴァキア科学アカデミー民俗学研究所がスロヴァキア民俗学研究の中心となる
1953	『スロヴァキア民俗学』（*Slovenský národopis*）創刊
	『チェコスロヴァキア民族誌』（*Československá ethnografie*）創刊（-1962）
1968	プラハの春、ソ連の軍事介入
	コメニウス大学に民族誌・民俗芸能学科が設置される
1969	『民俗学報』（*Národopisné informacie*）創刊
1989	民主化革命
1993	チェコスロヴァキア分離、スロヴァキア共和国成立
1994	民俗学研究所から民族学研究所に名称変更
	『民俗学報』から『民族学会報』（*Etnologické rozpravy*）に名称変更
2004	ＥＵ加盟

ただし，この雑誌はタイトルこそ「チェコスロヴァキア」[13] という単語が使用されているものの，雑誌に掲載されている論文のほとんどは，チェコのあるいは現在のチェコ共和国東部のモラヴィア地域の民俗調査に基づくものであった。一年におよそ10本前後掲載される論文のうち，チェコスロヴァキア共和国が成立する1918年までの期間においては，スロヴァキアでの民俗調査をもとにした論文は，年に１本あるかないかの程度であり，事実上，チェコ人研究者を中心とした「チェコスロヴァキア」研究の雑誌であった。実際の調査活動においても，例えば，スロヴァキアでの民謡の収集数については，チェコ人研究者によるものよりは，スロヴァキア人研究者によるもののほうが圧倒的に多く（Černik 1915：254），スロヴァキア国内の調査・研究はスロヴァキア研究者が中心に行っていた。ただし，当時スロヴァキアはハンガリーの一部で，チェコとは別の国であったにもかかわらず，チェコ人研究者とスロヴァキア研究者によってチェコスロヴァキアの民俗学会が結成され（Brouček 1984：614），後のチェコスロヴァキア時代の文化的な基礎を作ることに貢献したことを考えると，この時期の民俗学の活動そのものが，チェコとスロヴァキアを結ぶ役割を果たしていたと考えられる。

さらに，このような隣国との関係だけでなく，19世紀末の『スロヴァキア博物館雑誌』においては，民俗学の専門文献として，チェコ，ハンガリー，ドイツ，クロアチア，ルーマニア等の民俗誌が紹介されており[14]，それぞれの地域の民俗学的活動，およびそれに携わる知識人層は，各国の枠組みに収まらず中欧全体のなかで互いに影響を与え合っていたと考えられる。

2.2 チェコとスロヴァキアの微差

1918年にスロヴァキアはハンガリーの支配から脱却し，チェコとともにひとつの国として独立したが，このことは，スロヴァキアの民俗学をさらなる発展へと導くきっかけとなった。スロヴァキア民族文化団体であるマティツア・スロヴェンスカーも1919年に復活し，1863年の時とは異なり，民俗学のみで独立した研究部会を中心に，活発に調査を行い始めた[15]。さらに，それまでの『スロヴァキア博物館論集』や『博物館雑誌』とは異なり，マティツア・スロヴェンスカーは民俗学のみの定期刊行学術雑誌である『民俗学論集』（*Národopisný sborník*）を1939年に創刊し，スロヴァキア民俗学を発展に導く中心的な役割を果たした（Podolák 1998：9；Urbancová 1979a：104）。

チェコスロヴァキア独立以降，チェコ民俗学との交流もより深いものとなり，チェコ人の研究者によっても，スロヴァキアの民俗誌や民俗芸能研究が本格的に進められた。中にはスロヴァキアの民俗学関連機関の一員として精力的に活動する者もおり，このようなチェコ人の活動は，スロヴァキアの民俗学の発展に重要な役割を果たした（Michálek 1998：130-131）。独立以降の1920年代は，『チェコスロヴァキア民俗学紀要』におけるスロヴァキアを研究した論文数も増加しており，この点でもチェコとスロヴァキアの間

の研究のつながりが確認できる。

このチェコスロヴァキア第一共和国時代は，チェコスロヴァキア主義の下，チェコとスロヴァキアはそれぞれ独自の文化を持つが，その上位概念としての分類においては同じ民族として考えられていた。したがってチェコとスロヴァキアの場合，どちらがどちらを調査しても自文化を調査していることになるはずなのであるが，実際はチェコによるスロヴァキアの調査が，その逆よりも圧倒的に多い。また，当時の民俗学の論文のスタイルは特定の村の特定の事象についての調査報告が主流であったが，スロヴァキア全体の民俗誌的状況を概説した論文（Chotek 1924）や，モラヴィアとスロヴァキアの民俗学的な相違を検討する論文（Húsek 1925）など，スロヴァキアの文化をひとつの総体として捉えた，多少傾向の異なる研究が，チェコ人の研究者によって行われたことにも注目したい。チェコにおける民俗学は，スロヴァキアという，事実上の他者との比較研究を行っていた点で，ドイツ語圏の民族学に近かったと指摘できる。一方で，スロヴァキアにおいては『スロヴァキア博物館会報』『民俗学論集』のいずれも，スロヴァキア国内の調査に基づいた論文が中心であり，その点では，より純粋な意味で民俗学が営まれていたといえる。チェコとスロヴァキアの民俗学はその統合を目指していたにもかかわらず，このような微妙な差異は残したままであった。

3 社会主義時代における文化人類学的問い

3.1 社会主義的思考への転換

前章で概観したように，スロヴァキアの文化人類学は，民族復興運動，それに続くチェコスロヴァキア独立運動と関連しつつ，自らの文化的な遺産を収集，探求することを目的としてきた。しかし，第２次世界大戦後，1948年に共産党がチェコスロヴァキアの政権に就き，社会主義国となったことで，当時の民俗学の目的は新たに設定されなおされた。

社会主義時代の初期に，まず民俗学関連の研究機関も再編された。1949年にマティツァ・スロヴェンスカーの民俗学研究部が閉鎖され，研究の中心はスロヴァキア科学アカデミー民俗学研究所に移動した。この研究拠点の移転に伴い，マティツァ・スロヴェンスカー発行の『民俗学論集』は1947年で廃刊となり，1950年から同名の雑誌が民俗学研究所から発行されるようになった。しかし，1953年にはその雑誌名も『スロヴァキア民俗学』（*Slovenský národopis*）に変更され，これをひとつの区切りとして科学アカデミー民俗学研究所は，マルクス主義的民俗学の本拠地としての立場を確立するようになった（Urbancová 1979a：107）。

雑誌の編集が民俗学研究所に移動した後の，１つの顕著な変化としては，『民俗学論集』において理論的な水準，すなわちマルクス主義科学に基づく方法論が重視される傾向が

強くなったことが挙げられる（Podolák 1998: 8)。それを示す具体的な例として，第10号（1951年）では，当時のソビエト連邦における文化人類学的研究にあたる「ソビエト民族学」が特集として組まれたことが挙げられる（【表２】参照)。これらの論文はソビエト連邦の研究者によって執筆されたものの翻訳であり，それまでのスロヴァキアの村落における特定の「伝統的」な事象を調査し，記述するというスタイルとは異なる，マルクス主義的方法論を用いた調査，研究活動の方針が示された。

【表２】 Národopisný sborník 10（1951）論文一覧

A. Melicherčík, Sovietska etnografia - náš vzor
ソビエト民族誌学――われわれのパラダイム

・***Problémy všeobecncnej etnografie***（*民族誌学についての一般的問題*）
S. P. Tolstov, Význam prác J. V. Stalina o otázkach jazykovedy pre vývin sovietskej etnografie
言語学についてのスターリンの著作の意味について――ソビエト民族誌学発展のために
S. A. Tokarev, Engels a súčasná etnografia
エンゲルスと現代の民族誌
S. P. Tolstov, V. I. Lenin a akutuální problémy etnografie
レーニンと現在の民族誌についての問題
I. I. Potechin, Úlohy boja s kozmopolitizmom v etnografie
民族誌における世界市民主義との戦いについての課題
S. P. Tolstov, K otázke o periodisaci dějin prvobytné společnosti
原始社会の歴史区分に関する検討

・***Dejiny ruskej a soveitskej etnogradie***（*ロシアおよびソビエト民族誌学史*）
S. A. Tokarev, Přinos ruských učencu do světvé etnografické védy
ロシア人研究者による世界の民族誌学への貢献
S. A. Tokarev, Hlavné vývinové etapy ruskej predrevolučnej a svietskej etnogradie
ロシア革命以前のソビエト民族誌の主要な発展期

・***Problémy etnogenezy***（*民族起源の問題*）
S. A. Tokarev a N. N. Čeboksarov, Metodologia etnogenetického skúmania etnografického materiálu vo svetle prác J. V. Stalina o otázkach jazykovedy
民族誌的資料についての民族起源調査の方法論――スターリンの著作における言語学的課題より

・***Etnografia koloniálnych krajín***（*植民地の民族誌*）
I. I. Potechin, Niektoré problémy etnografického štúdia národov koloniálnych krajín
植民地の民族に関する民族誌学の問題点

・***Sovietska etnografia obdobia socializmu***（*社会主義時代のソビエト民族誌*）
M. A. Sergejev, Malé národy Severu v epoche socializmu
社会主義時代の北方少数民族

L. P. Potapov, Výskum socialistickej kultúry a spôsobu života Altajcov
アルタイ族の社会主義的文化と生活様式についての調査
N. N. Čeboksarov, Etnogradické študium kultúry a života moskovských robotníkov
モスクワの労働者の文化と生活についての民族誌的研究
G. S. Maslovová, Kultúra a život na jednom z kolchozov Podmoskovska
ポドモスコウスカのコルホーズの文化と生活

・***Problémy etnografických múzeí***（民族誌博物館に関する問題）
L. P. Potapov, Hlavné otázky etnografickej expozície v sovieskych múzeách
ソビエト博物館における民族誌的展示についての主要な課題
J. Mjartan, Práca sovieskych etnografických múzeí
ソビエト民族誌博物館の成果

ただし，単純に理論的な水準の重視という点のみであれば，社会主義以前の1940年代初めから，既に『民俗学論集』において理論的な向上が目指され始めていた。1946年にはスロヴァキア人人類学者のメリヘルチークがソシュールを引用しつつ，スロヴァキア民族誌学に構造主義的思考の導入を試みていた（Melicherčík 1946）。さらに1947年にはボアズの論文の翻訳も掲載されており，西側ヨーロッパの人類学との接触により，スロヴァキア民俗学の理論的な向上を図る姿勢を確認することができる。メリヘルチークをはじめとした第２世代のスロヴァキア民俗学者が，民俗学に理論と方法論を導入しようとした活動は，収集活動に重点をおいていた第１世代と区別され，後のスロヴァキア民俗学者によっても評価されている（Urbancová 1979a：106-107）。しかし，チェコスロヴァキアの社会主義化によって，このような自発的な理論的活動の萌芽は，当時の政治的な文脈とともに新しい「マルクス主義的」理論の導入にとって代わられた。さらに，ソビエト民族学の方法論にそぐわない研究方法を「ブルジョワ的な残留物」とみなし，そのような研究者を反共産主義者，あるいはブルジョワ民族主義者と宣告する（Bituaikova 2003：70）ことで，イデオロギーの徹底も図られた。

チェコスロヴァキアに社会主義政権が成立して間もない1949年のチェコスロヴァキア民俗学研究会では，「マルクス主義的方法論」の確立のために研究に取り組むことが研究者の義務として受け入れられ，具体的には，以下の事項が20世紀の後半における民俗学の研究対象として定められた（Horváthová 1973：172；Slavkovsky 2006：18）。

（1）スロヴァキアにおける民俗文化の発展
（2）産業化がもたらす伝統文化への影響
（3）カルパチア地方の民俗文化
（4）在外スロヴァキア人の文化と，スロヴァキア国内の非スロヴァキア民族の文化
（5）民族（俗）誌学と民俗芸能学の歴史，方法論，理論。

このうち，特に（1），（2），（5）はスロヴァキア民俗学を社会主義時代にふさわしい

ものとするための主な指針であり，社会主義時代を通して効力を持ち続けた指針でもある[16)]。

この方針の影響は1953年に創刊された『チェコスロヴァキア民族誌』（*Československá ethnografie*）の巻頭言にも現れており，社会主義時代においては，「重要かつ現実的な問題を解決し，マルクス・レーニン主義に基づいた本当の学問を推進する（原文において，この文部分は字体を変えて強調されている：筆者註）」必要があり，そのためには，現在の生活様式と現在のチェコとスロヴァキアの人々の文化に注目すべきだと主張されていた（Nahadil 1953：1–2）。1950年代の前半には，このような主張に沿うような，社会主義時代になってから建設された協同組合の農場に関する調査プロジェクトも，実際にチェコスロヴァキアで実行されていた。戦前の農業との単純な比較だけでなく，50年代半ばにおいても既に社会主義建設の時代から生活様式は変化しているため，この研究は必要なものとして認識されていたのである（Nahadil 1955：117）。

このような当時の研究方針などから，当時は「現在の現象」を探求する姿勢が民俗学者に求められていたことが伺える。社会主義時代における新たな民俗学とは，新しい文化，社会主義，スロヴァキア人自身を創造する手助けとなるべきものであり（Melicherčík 1950：36），過去の「伝統的な」民俗文化だけでなく，「現在」という視点も民俗学の中心に据えられる必要があったのである。当時の民俗学が，村落部における素朴な伝統の収集活動から変容せざるを得なかったという背景において，民俗学研究会が採択した指針のうち，現在の民俗文化に注目する必要がある（1），（2）が示すのは，マルクスの史的唯物論の影響を受けたと考えられる，文化の「発展」の探求であり，（5）はそのための土台となる理論として重要視されたのである。

この傾向は1950年代だけではなく，その後も続いた。60年代，70年代の社会主義時代の文化人類学の方法論に関する論文においても，必要とされる研究テーマとして共通していたのは「現代における新たな文化的生成」と「民俗文化の現代的諸相」のであり（Droppová 1966：594；Pranda 1970：39），この同時代をみる視点は，社会主義期のスロヴァキアの民俗学の特徴として強く組み込まれていた。ただし，具体的にどのようにこの視点が用いられて民族（俗）誌的論文が執筆されたかという点については，多少現実と理念の間に齟齬が生じていることに注意する必要がある。3.2では，このことについては，当時導入されたマルクス主義との関係も含めて再度論じる。

3.2 理念と実践の差

3.2.1 マルクス主義と「現在」をみる視点

3.1では，初期の社会主義時代における政治的イデオロギーと結びついた形での民俗学の変容の過程を捉えることを試みた。しかし，それは当時のマニフェスト的な論文を対象にした考察の結果であり，理念の導入と，実際の具体的な個々の民族誌や研究論文

における「マルクス主義的な」実践は，必ずしも一致しているとは限らない。したがって，この節では，当時の民族誌と研究活動からみた「社会主義的」文化人類学のあり方を検討する。

同じマルクス主義を土台とはしていても，スロヴァキアにおいては，西ヨーロッパのマルクス主義人類学のような理論的潮流の形成には至らなかった。「マルクス主義的方法論に基づいた民俗学」というフレーズは（とりわけ初期において），社会主義時代の研究論文にしばしば登場するが，実際のところ，マルクス等の著作を引用して民族誌の分析が試みられたわけでもなく[17]，現在のことを研究するということ以外の方針の提示は乏しかった。では，当時の研究者にとっての「マルクス主義的方法論に基づいた民俗学」とは何であったのだろうか。

社会主義時代に執筆されたスロヴァキア民俗学の学説史的論文においては，第２次大戦後の転換期の記述に関連して，マルクス主義がさまざまに解釈されている。「民俗学研究所ではその初年から，ブルジョワ的理論の批判，および研究者が自分の調査研究分野においてマルクス主義的考え方を深めるための理論的な研究会が行われた。そこでは，マルクス＝レーニン主義の基本的な著作として，社会の発展についての史的唯物論的視点の正しさを示す民族誌を基づいたマルクスとエンゲルスの著作，および民族の問題に取り組んだレーニンの著作が特に重要視された」（Horváthová　1973：176）。「過去の生活様式や文化を収集することを止め，民族的・社会的に対立していた人々の集団に対して，その集団の枠を超える新しい生活の様式，新たな人々の関係を積極的に形成するようなマルクス・レーニン主義的方法論に基づいた研究方法に取り組み始めた」（Filová 1977：533）。「文化の発展についてのマルクス主義的考え方に基づき，物質的な生活基盤とそれが人々の生活や文化にあたえる影響について探求する必要があったため，（社会主義前後で）民俗学を学んだ学生の修士論文のテーマにも変化が現れた」（Urbancová 1979a：108）。最初の引用では史的唯物論，２番目の引用では階級の問題，最後の引用では生産構造への注目，とそれぞれ異なる側面のマルクス主義が強調されている。

しかし，実際のところ，『スロヴァキア民俗学』などの学術雑誌に掲載された多くの民族（俗）誌的論文においては，このような理論的側面への言及はあまり見当たらない。当時の研究論文の多くは，村落における特定の文化的な事象についての聞き取り調査を行い，その過去から現在までの変容についての記述が中心的であった。一例として，1961年に発表された「ジアル・ナド・フロノン地域における季節農業労働者の生活について」（Bošková　1961）という論文を簡単に紹介する。スロヴァキアの山間部にあるこの地域では，ハプスブルク帝国時代の終わり頃，またはチェコスロヴァキア第１共和国時代の頃（19世紀末から20世紀はじめ）から，貧しい農民がスロヴァキア南部の農家へ出稼ぎに行くようになった。男性のみならず，女性や時には11，12歳の子供も農繁期の出稼ぎには加わっていた。論文は，このような当時の出稼ぎの概観に加え，農

作業の道具や，作業中の歌，出稼ぎにまつわる慣習などについての民族誌的な記述が中心を占めている。ただし，第２次世界大戦中は，この地域から出稼ぎに行っていた地域がハンガリーに占領され，農業労働者は代わりにドイツに出稼ぎに行き，戦後は近隣の国有農場に働きに行っていたなど，時代に応じた変化も指摘されている。論文の最後は，1951年にこの地域に工場が建設され，季節労働を行っていた人々の多くは工場に勤めるようになり，この地域の生活様式は大きく変わったと結ばれている。

この例の場合は，時系列的な変容が明白であるが，1950，60年代は，「現在」の生活がまだまだ「伝統的」な村落がスロヴァキア国内に多数存在しており，特に物質文化については，結果的に社会主義以前とあまり変わらない「伝統的」な民俗文化についての論文も多く掲載されていた。その意味では，社会主義期の研究に必要とされていたこの「現在」をみる視点も，実際にはこのように部分的に受け入れられていたものだと考えられる。

当時，民族誌を用いてマルクス主義を批判・検討をすることが，政治的に何らかのリスクを背負うものであったと考えると，「マルクス主義的方法論」は事実上，調査対象を指定するだけで，マルクス主義に関する理論的な言及は避けられていたものであったと考えられる。マルクス主義は，政治的なイデオロギーであったために，社会主義時代の間はその根本に触れられることない硬直した思想となっていた。

3.2.2　イデオロギーの範囲内における民俗学の展開

このように，中心的な理論であったはずの「マルクス主義的方法論」自体は，矛盾を抱えていた一方で，民俗学は政治的なイデオロギーの範囲内で，学問のあり方を見つけ，その範囲内で展開をみせた。1970年代には民族誌地図の作成プロジェクトが立ち上がり，多くの民俗学者を動員して，1971年から75年の間にスロヴァキアの250の地域での調査を行い，それをもとに地図が作成された（Kovačevičová　1990：x；Slavkovský 2006：19-22）。1980年代は『スロヴァキア民俗学』誌上において毎年単一テーマの号が準備され，民俗学研究所によってそれに伴う学際的，国際的な研究会が開催される（Vanovičová　2006：118および【表３】参照）など，社会主義時代の研究者は共通の目的の下で活発に活動を行っていた。

【表 3】 Slovenský národopis 特集タイトル一覧（1975-1990）

1975
(2) Tradičná kultúra Slovákov na bývalej Uhorskej Dolnej zemi.
旧ハンガリー王国におけるドルナー・ゼン（低地の地域）におけるスロヴァキア人の伝統文化
1976
(2) Národopisný výskum robotníckej oblasti
労働者地域における民俗調査
(3) Akutuálne otázky folklorisktiky v ČSCSR
チェコスロヴァキア民俗芸能学に関する現実的問題
1977
(1) Na margo druhého súboru študií o Honte
ホント地方について新たな視角からの研究
1979
(2) Kultúra družstevnej dedeny Sebechleby
セベフレビ村の協同組合の文化
1980
(1) Chotárne sídla v československých Karpatoch
チェコスロヴァキアのカルパチアにおける村落共有地
(2) Nárosopisný výskum robotníckej triedy
労働者階級の民俗調査
1981
(2/3) Spolupráca socialistických krajín v rámci medzinárodonej komisie pre výskum ľudovej kultúry Karpát a Balkánu.
カルパチアとバルカンの民俗文化に関する調査のための国際委員会にみる社会主義国協力
(4) Súčané problémy paremilogického študia v ČSSR
チェコスロヴァキアの諺研究における現在の問題
1982
(3/4) Včleňovanie progresívnych tradicií ľudonej kultúry do systému socialisticky kultúry a života
pracujúcich ①
民俗文化から社会主義文化および労働者の生活システムへの発展的な伝統の統合
1983
(1) Včleňovanie progresívnych tradicií ľudonej kultúry do systému socialisticky kultúry a života pracujúcich ②
(1) K dejnám slovenskej etnografie
スロヴァキア民族誌史
(2) Folklór ľudových oslobodzovacích hnutí 16-19 stročia v oblasti Karpát a Balkánu
カルバチアとバルカンにおける16-19世紀の民族解放運動の民俗芸能
(3/4) Úloha rodiny v etnokultúrnych procesoch v podmiekach socializmu.
社会主義的状況における民族文化の発展に関する家族についての仮題
1984
(1) Ľudova balado - Problémy komplexného štúdia žanru
民衆のバラード――学問分野の複合的問題
(2) K 40.výročiu slovenského národoného povstania
スロヴァキア民族蜂起40周年に寄せて

(2) Súčasní tvorcovia a nositelia hodnôt ľudových umeleckých tradicií ①
現代における民芸の価値の生産者と後継者
(3) Socialistická dedina-Miesto a význam tradicií v spôsobe života a kultúre pracujúcich
社会主義的村落――労働者の文化と生活様式に関する伝統の意味と位置
(4) Súčasní tvorcovia a nositelia hodnôt ľudových umeleckých tradicií ②
1985
(1) K 40. výročiu oslobodenia Bratislavy sovietskou armadou
ソビエト軍によるブラチスラヴァ解放40周年に寄せて
(2/3) Včleňovanie pokrokových tradicií ľudovej kultúry do systému systému socialisticky kultúry a života pracujúcich ③
(4) Súčasní tvorcovia a nositelia hod nôt ľudových umeleckých tradicií ③
1986
(1) Tradicie-K otázkam teórie a praxe, ich pôsobenia v socializme（konferencia）
伝統――社会主義期における理論と実践、その影響についての問い
(3) Život a dielo Pavla Dobšinského - K stému výročiu smrtí
パヴェル・ドブシンスキーの人生と作品――100回忌によせて
(3) Súčasní tvorcovia a nositelia hodnôt ľudových umeleckých tradicií ④
1987
(1) Súčasní tvorcovia a nositelia hodnôt ľudových umeleckých tradicií ⑤
(4) Venované 70 výročiu veľkej októbrovej socialistickej revolúcie
10月社会主義革命70周年によせて
1988
(1) K historickým a etnokultúrnym determiáciam spoločenskej integracie Ciganov-Romov v procese výstavby rozvinutého socialismu v Československu.
チェコスロヴァキアにおける発展的社会主義の建設過程における、ロマの社会統合の歴史的、民族文化的解決に向けて
(3/4) Tradicie o zbojníctve v kultúre a historickom vedomí národov československa –K 300 výročiu naroddenia Juraja Jánošika
チェコスロヴァキア民族の歴史的認識と文化における義賊の伝統――ユーライ・ヤーノシーク生誕300周年
1989
(1/2) Svadobný obrad - Tradicie a súčasnosť
婚姻儀礼――伝統と現代
(3) K dejinám spôsobu života Baníkov na Slovensku
スロヴァキアにおける鉱山労働者の生活様式の歴史
(4) Tvorivá aktivita človeka
人間の創作活動
1990
(1/2) K funkcii spoločenských skupín pri formovaní spoločenského vedomia a spôsovu života - historiské a etnokultúrne aspekty
社会知識と生活様式の形成に際する社会集団の機能――歴史的、民族文化的観点から
(3) Súčasnosti a perspektívy slavistického študia v národopise a príbuzných vedých disciplínach.
民俗学および隣接学問におけるスラヴ学の現在とその視角

（ ）内の数字はその年の特集が掲載された号番号を示す。

一方で，研究活動を支える研究者同士の交流を促進するような体制作りも試みられ，民俗学研究所以外のスロヴァキア各地の博物館等，そのほかの研究機関所属の民俗学者と連携を深め，民俗学関連の諸機関の発展を目指すための団体（Slovenská národopisná spoločnosť）[18] も1958年に結成された（Leščák 1969：3-4；Pranda 1973：2）[19]。このような研究者同士の交流はスロヴァキア国内だけに限らず，他の社会主義諸国の研究者との交流も積極的に試みられた。コメニウス大学民俗学科が1969年に創刊した雑誌『スラヴ民族学』（*Ethnologia Slavica*）[20] の編集にあたっては，ポーランド，チェコ，ロシア，ウクライナ，スロヴェニア，クロアチア，セルビア，マケドニア等スラヴ諸国の研究者が編集会議に招かれ，スラヴ語圏以外の言語（ドイツ語など）での論文発表が試みられた（Podolák 1993：9）。当然ではあるが，このようにスロヴァキアの文化を，ヨーロッパの社会主義国において民族的に多数派であるスラヴの文化のなかでの位置づけることが強調されていたことは，政治的な文脈にも沿うものでもあった。ただし，スラヴ民族学という名を冠しつつも，民族理論などについての論考はそれほど深められたとはいえず，ここでも重要であったのは研究内容というよりは，研究対象であった。

一方で，社会主義時代の初期からのテーゼとされてきた「現在」をみる視点は，1980年代に質的な変容を迎え，別の形で民族学に刷新をもたらすようになった。なぜなら，80年代になってはじめて「現在」をみる視点は，イデオロギーでなく現実的な問題として，研究者に理解されるようになったからである。ちょうど，80年代は，村から都市への住民の移動，それに伴う生活の変化，また教育水準の向上などによる村の生活の変化が顕著に現れ始め，それによって伝統を喪失することへの危機感が研究者に実感されるようになった時期でもある（Leščák 1980：336）。したがって，この時期以降，研究においても，産業化，都市化した村落地域における生活様式の変化に重点が置かれるようになり，「現在」をみる視点はそれまでの伝統文化の発展形態についての研究から，おそらく本来の目的に近い，現代社会における民俗文化や社会についての研究に生かされる形に切り替わり始めた。

政治的イデオロギーの制約は当時の民俗学の発展を阻んできたが，その範囲内での社会主義時代の民俗学にも成果はある（Slavkovský 2006）。それを総合すると，民俗学を博物館的な民俗文化の「収集活動」から民俗文化について「研究」への移行を可能にしたことを挙げることができる。ここでの「研究」とは，1940年代以前に多くみられた民具などの単なる収集と記録と比較して，50年代以降は学問として制度化された民俗調査を行い，研究論文を執筆，発表する活動のことを指す。理論的な追求が進まなかったことに限界はあるが，民族復興運動から始まった起源を持つにもかかわらず，「伝統」を掘り下げ続ける懐古趣味的な傾向から逃れて，いまある「現在」の姿に忠実であろうとすることができたのは，当時の政治的イデオロギーの存在によるものと考えられる。

むしろ，この「現在」をみる視点の存在こそ，社会主義時代の民俗学の重要な成果と考えられるのではないだろうか。

この第 3 節では，社会主義時代の文化人類学の学問的な展開について検討してきたが，その限界は，当時の研究者の思想が見えない点にある。政治的イデオロギーから逸れた思考や不満は文献としては残らない。そこで第 4 節では，社会主義が終わった後の文化人類学研究論文や動向を通して社会主義時代の人類学を考察することを試み，同時代と後の時代からという 2 つの方向から，総合的に検討を加えることを試みる。

4 ポスト社会主義時代における社会主義時代の遺産

4.1 方針の転換と新たな政治性の存在

社会主義政権が終焉を迎えた1989年以降，文化人類学は社会主義的な政治的イデオロギーから自由になることができた。しかし，それは裏を返せば，中心となる軸を失い，新たに文化人類学のあり方を模索する必要に迫られたことを意味する。89年以降，西側の文化人類学に自由に触れることは可能になったが，短期間で新たな方針に入れ替わったわけではない。多くの研究者は社会主義時代に教育を受け，研究活動を続けてきた。無論，その一方では社会主義時代の民俗学のあり方への不満もあり，それぞれの研究者にとって，新しい時代の文化人類学において何をどう研究するかということは緊急の課題であったと考えられる。

1990年には，民俗学研究所のレスチャーク（Leščák）によって，人類学者に民主化後のスロヴァキア文化人類学のあり方についてのアンケートが行われた。このアンケートの中心となる項目は 3 つあり，(1) 方法論的，哲学的な根本の変化に関連して，今後の人類学のあり方について，(2) 今後のスロヴァキア民俗誌における実証や分析の水準について，(3) かつてはタブーであったテーマや，今後調査が必要な問題について，それぞれ質問されており，解答は自由記述式である（Leščák 1991）。この質問項目自体からも，それまでの民俗学における方法論への疑問，調査対象に制限があったことへの不満が伺える。

1989年以降のスロヴァキア文化人類学と方向と直接関係する（3）の質問については，中欧の文脈におけるスロヴァキア文化／人と自然の共生に関する民族学的研究／中欧地域の民族誌／スロヴァキア国内の少数民族／スロヴァキアにおける倫理観や美的感覚／社会集団や非公式団体に関する民族学的研究／現代における家族の生活，など様々なテーマが回答として寄せられた。このうち，文化圏としての中欧への注目は，1990年代におけるひとつの顕著なトレンドでもあった。その中心となった1994-1996年にかけての民族学研究所のプロジェクト「民族間の関係における民族文化の伝統――ヨーロッパ地域文化研究の視点から」では，スロヴァキア文化をヨーロッパというより広い視点から

捉えなおすことが目指された（Stoličná 1994: 402）[21]。第2次世界大戦以前の状況を鑑みれば，スロヴァキアと西側のヨーロッパとのつながりは，強いものであり，ヨーロッパという文脈に位置づける試みは妥当である。しかしそれ以上に，ロシアから離れてEU加盟などを視野に入れた「ヨーロッパ回帰」を志向する政治的背景がそこには存在している。加えて，社会主義時代にスラヴとしての文化的な位置づけが重要視された反動も，そこに存在すると考えられえる。

このヨーロッパとの関係性についてのテーマ以外に，1990年代のスロヴァキア人類学の動向については，都市における研究，民族に関する問題，社会集団，社会主義時代の宗教，民俗文化についての総合芸術（美学）的研究[22]などが，成果として挙げられている（Kiliánová 2002: 279-280）。また，民俗芸能学の分野では，民俗芸能と政治の関係性[23]への注目，オーラルヒストリーの取り入れ，現代の民間信仰についての研究（Šrámková 2003）が，新たな傾向として指摘されている。しかし，一方でこれらの論者によって成果としては報告されない部分として，スロヴァキアの伝統文化の研究や，ヨーロッパ地域のとの比較研究について，似たような研究が多く出たことが指摘されている（Kiliánová 2002: 283-284）。確かに，1990年代前半は，特定の民俗文化について，19世紀末から20世紀初頭における様相を歴史的に探求した文化史的な研究が多く見られ，理論的な蓄積を生むような論文はまだ少数であった。社会主義時代のイデオロギーが解けたからといって，文化人類学が学問として一定のディシプリンを有する以上，単に社会主義時代以前の文化を対象とした懐古主義的な研究や，あるいはヨーロッパの近隣の民俗文化との比較類型的な研究が新しい時代の民俗学／人類学として評価されたわけではなかった。

さらに，スロヴァキアにおいても社会主義時代に都市化は進み，伝統社会は消滅しつつある状況下で，民俗学をどう続けるかを新たに問う必要も生じていた。他の国の文化人類学者も直面した問題に，スロヴァキア人類学者は社会主義的イデオロギーを失った1989年になって，急に直面しなくてはならなくなったのである。前述のように，既に1980年代には伝統文化が消失することへの危機感は研究者の間で意識されていたが，当時はまだ，民俗学の学問としてありかたを探求するという状況にはなかった。この意味では，ポスト社会主義時代は，単純に社会主義時代の民俗学を反省し否定するだけでなく，西側の議論を取り入れるにしろ，そうでないにしろ，新しく学問としてのあり方を再考する必要に迫られていたことになる。ポスト社会主義時代に，それまで研究対象が制限されていたことに対しての反動が「ヨーロッパ志向」という別の政治性に吸収されたのは1つの傾向として指摘できるが，それは表面的なものである。これについては4.2で詳しく述べるが，むしろ，社会主義時代に，マルクス主義方法論として発展が凍結されていたフィールドにおける現象の人類学的分析方法などの理論的側面を強化することが，スロヴァキアの人類学者にとって大きな課題だったと考えられる。さらに，この問

題意識がすべての人類学者に共有されていないことも，ポスト社会主義期の人類学の状況を難しくしていた。

4.2 ポスト社会主義となるために

1990年代の以降のスロヴァキアの人類学については，研究テーマに関しては，新たな広がりを客観的に指摘することが可能であるが，理論的に発展に関しては，人類学者間の個人差が目立ち，全体としての方向性を模索する状態が続いていたといえる。前節で取り上げた人類学者へのアンケートの質問（1）では，今後の人類学の方法論のあり方について問われたが，その列挙された回答には，社会主義時代の理論についての強硬な批判もある一方で，マルクス主義的方法にある程度の有効性を認めたものあり，一概に１つの傾向を見い出すことは難しい。西側の人類学や隣接学問から分析方法を取り入れていこうとする姿勢は，いくつかの回答にも記入されており，1990年代の『スロヴァキア民俗学』誌上からも，実際にその傾向を読み取ることができる。しかし，ドイツ語や英語で執筆された西側の文化人類学の文献を引用し，社会主義時代とは異なるテーマに取り組んだ論文が存在する一方で，同時に理論的な展開には乏しい調査報告型の論文や，文化史に傾倒した論文も多数存在していた。

それほど数も多くはないスロヴァキア文化人類学関係者のなかで，新たに学問としてのディシプリンを形成しようする研究者と，それとは距離をおく，あるいは別の方向に進もうとする研究者が存在する混沌とした状況については，現地の人類学者によっても認識されており，それについての議論も『スロヴァキア民俗学』上で交わされた。そのうちの一例として，とりわけ農場の集団化とその解体というトピックから避けることのできない農業分野の研究における以下の議論は非常に示唆的である。

農業分野の研究においては，既に1990年代の前半から，今後の文化人類学の課題として，農業の集団化や民営化などの政治的な制度の力による社会文化的なシステムの変容について注目する必要性が指摘され（Danglová 1992：249），それに関連する研究も一部の研究者によって行われていた。しかしながら，それでも社会主義時代にイデオロギー的にタブーだった，あるいは制約を受けざるを得なかった問題についての興味が，1989年以降広がっていた割には，全体としてそれに関連する質の高い研究は進んでいないという批判を主旨とした論文（主として Leščák 1995：378；Podoba 1996：212）が『スロヴァキア民俗学』に相次いで掲載されていた。このような革新的な立場の人類学者による批判の矛先は，主として歴史研究に近いスタイルをとるペテル・スラフコフスキー（Peter Slavkovský）の農業に関する論文に向けられていた。

スラフコフスキーは，戦間期―社会主義期―ポスト社会主義期と，スロヴァキア農業の歴史的な連続性を重視した研究を行っており，1990年代前半に，とある村の集団農場についてその始まりから現在までを歴史的に記述した論文（Slavkovský 1993a）や，

スロヴァキア農業の状況の変化について戦間期から現在までのマクロ的に概観した論文（Slavkovský 1993b）を続けて発表した。また，スロヴァキアの農業における社会主義期，およびポスト社会主義期の2回の転換について論じた論文（Slavkovský 1995）では，89年以降の協同農場に関する一部の研究について，(1) 社会主義以前のスロヴァキア農業について触れられていないこと，(2) もし，農業が集団化されなければ，現在ドイツやオーストリアの農業のような形態になっていただろうと決め付けがちであること，(3) 協同農場が作り出した文化の存在を軽視していることを批判し[24]（Slavkovský 1995），前述の革新的な傾向の強い人類学者とは立場を異にしていた。

一方でスラフコフスキーの民族誌的研究が，革新派から批判されるポイントは主として2つであり，（マクロ的な視点であるため）民族学の研究として，フィールドで得たデータの分析が不十分であることと，現在の農業の問題から目をそらして歴史研究に偏っているということである（Leščák 1995：382；Danglová 1995：487-288；Podoba 1996：213-215）。しかし，これは単に個人の研究の批判ではなく，当時の人類学が抱えていた2つの問題を背景としている。まず1つは，「人類学／民族学的研究として」の研究水準の上昇が挙げられる。1989年以降，西側の研究に触れ始める中で，フィールドにおける村人の語りなどのデータを報告する，あるいは過去の民族誌を歴史的に編集し直すといった（従来であれば論文として認められた）研究のスタイルから，調査のデータに検討を加え，現状に対して新たな視点を提示し，理論的な貢献を行うスタイルの論文への切り替えが求められ始めた。とはいえ，社会主義時代に長く研究を続けてきた研究者にとって，その切り替えは容易なものとは限らなかった。

もう1つの問題としては，アカデミズム内の社会主義に対する姿勢が挙げられる。ポスト社会主義の諸問題に取り組んだ研究は，社会主義時代に批判的な検討を加える傾向が強くなりがちな反面，政治的な制約がなくなったにもかかわらず，社会主義に肯定的な評価を下すことや，現在の切実な問題から目をそらすということは，旧態依然とした社会主義的態度としてみなされがちであった。さらに，研究水準の向上を目指し，人類学をリードする研究者の多くと，社会主義に批判的な研究者は層が重なっており，スラフコフスキーのような従来型の研究を行い，かつ社会主義に肯定的な評価を下す研究者は二重に批判の対象となりやすかったと考えられる。この論争のみにおいては，確かにスラフコフスキーの論文の調査データの検討，分析の甘さが目立つが，そのような研究は彼に限らない。「反社会主義が客観的というわけでない」というスラフコフスキーの反論は（Slavkovský 1996：481），このような状況の一端を示すもので，アカデミズム内の反社会主義的姿勢も，この時期に存在したひとつの政治性として指摘できる。

ポスト社会主義期のアカデミズムにおける反社会主義的傾向は，社会主義的イデオロギーが研究対象を制限し，理論的発展を阻害したことを考えると，当然の反応ではある。とはいえ，この政治性の存在は，西側の理論を取り入れて現在の問題に取り組む／昔な

がらの村落社会を同じ方法で研究し続ける研究者，社会主義に批判的／社会主義に肯定的，ポスト社会主義的／社会主義的人類学者という，安易な二項対立を作り出す点に危うさがある。

農業分野における論争で批判されたような歴史的研究に向かう研究者の姿勢は，研究手法は社会主義時代のものかもしれないが，その行為は社会主義時代の「現在」をみる視点への反発とも解釈可能である。「伝統的な」民俗文化の研究に興味を持っていた研究者にとっては，1989年以降はじめて，イデオロギー的な制約なしに，「伝統的」と考えられている戦間期，あるいはそれ以前の時代の民俗文化を中心に研究論文を執筆することが可能となったのである。つまり，これらの研究は社会主義的であるとは限らず，別の形で社会主義時代の研究に対して批判的精神を持っているとも考えられる。その意味では，これまで「現在」をみる視点のために不十分であったかもしれない研究の側面を回復する作業として，ポスト社会主義期の人類学における歴史志向性を捉えることが可能である。同様に，社会主義時代の民俗学においては，文化の地理的連続性はイデオロギーによって切断されていたが，1989年以降はスロヴァキアの文化を，鉄のカーテンの向こう側を含めた中央ヨーロッパとの関係性に注目して論じることも可能となった。前節で指摘した89年以降の研究テーマのひとつである「ヨーロッパ志向」も，この一環として生じたといえるだろう[25)]。

つまり，ここにおいて歴史志向＝社会主義的／現在志向＝ポスト社会主義的という単純な図式は成立しない。むしろ，1989年以降のスロヴァキア人類学者間の思想の分裂については，人類学としての方法論と理論的分析を必要なものとしてどれだけ敏感になれるかという点に，その根があったと考えられる。理論的発展が制限され，あまり必要ともされなかった社会主義時代の民俗学から，過去の研究の蓄積を批判検討し，調査から新たな見解を加えるという文化人類学的な作業への転換に適応できるかどうかが重要な分岐点であり，これが社会主義時代以降の研究者を混乱させたのである。

5 総括と考察

これまでの各節において概観してきたように，社会主義的イデオロギーが人類学に与えた影響にはさまざまな側面がある。社会主義時代，マルクス主義はスロヴァキアの人類学においては深められず，どちらかといえば，そのイデオロギーに反さないことが暗黙の了解とされたため，その範囲内でフィールド調査の結果を報告するという，いびつな形で人類学を拘束した。その結果の負の側面は，この時代の人類学における理論的発展の停止である。社会主義時代にも，洞察の優れた民族誌は存在し，またスロヴァキア国内の伝統文化をくまなく掘り下げたという点での蓄積は存在する。しかし，それを生かすような理論的な蓄積には至らなかった。

それでも，ソビエト民族学という一定の制度をもつディシプリンが紹介されたことにより，文化人類学は社会主義以前の民族復興主義運動と連動した博物館的な収集活動から，文化に関するひとつの学問として地位を獲得するに至ることができた。社会主義時代の民俗学において取り入れられた「現在」をみる視点は，当時の研究に新たな方向性を示した一方で，それまで多くの研究者の関心の対象であった伝統文化を掘り下げる研究に制約を加えた。一見，政治とは関係が薄いように見える「伝統的」な文化の研究であっても，「現在」との関連を要求され，西側の隣国との連続性を無視せねばならないなどの制約はあり，伝統文化そのものを掘り下げるには限界があった。

1989年以降，このような研究上の不満が，伝統文化を歴史的に掘り下げ，ヨーロッパとしての文化的な位置づけを探求するような研究の流行の背景となった。一方で，西側の人類学を取り入れようとする革新的な人類学者は，このような立場からは距離を置き，ポスト社会主義時代におけるフィールドの問題に取り組むことをひとつの命題としていた。しかしながら，これらの研究者たちにとっても，比較的スムーズに西側の研究を受け入れることが可能であったのは，社会主義時代の研究活動におけるキーワードともいえる「現在」をみる視点によって，その土台が形成されていたからではないだろうか。この視点は，社会主義期の後半においては，フィールドにおける現状としても自覚されるものとなったが，それは1989年以降も必要とされ続けたものである。この立場の差は，単なるテーマ選択の問題を示すのではない。それはスロヴァキアの人類学を，西側と同じ「文化人類学」に切り替えるか，イデオロギー的な制約を廃して，社会主義時代の民俗学の流儀を貫くかという今後の学問全体の方針に関わるものでもあった。

ただし，このような葛藤を包含してはいるが，現在のスロヴァキアの「文化人類学」は，歴史研究でもなく，分類学的な研究でもなく，統合的な文化と社会の研究としての発展を目指し，欧米を中心とした文化人類学の学問世界の中で，「アト・ホーム（at home）」の人類学として自己の位置づけを図ることが提案されており（Kiliánová 2002: 283-284），若い世代は，概ねこの方針に同調している。現在は，スロヴァキアで文化人類学教育をうけた学生であっても，博士課程在学中にヨーロッパ域内の外国の大学に短期留学したり，ヨーロッパ域内の国際的な研究会に参加したりする機会は多く，若い世代ほど，現在の欧米の人類学の研究動向に触れることが日常的になりつつある。このような背景もあり，現在の傾向としては，西側の人類学の理論を取り入れ，同じ研究水準で，自国の文化研究を行うことが目指されているといえる。

この意味では，スロヴァキアにおける現在の「文化人類学」は，社会主義時代のイデオロギーにより，欧米の人類学や民俗学が陥りがちであった「永遠の未開社会」的な幻想から脱却しやすい土壌にあった点では，スロヴァキアの人類学が現在の西側の「文化人類学」を取り入れる際には有利であった。ただし，他の旧社会主義国においても，同様の現象が生じているとは限らない点には注意が必要である。社会主義時代の文化人類

学の中心であったソビエト民族学では，民族起源研究が重要なテーマとされ，その理由の１つとして，ソビエト連邦の多民族統治体制における各統治体の領域確定に関係していたことが挙げられている（渡邊 1999：4-6；高倉 2003：74）。ソビエト連邦でも，「現在」をみる視点は，必要とされてはいたようであるが（トーカレフ 1970：25），その優先順位が高かったとは限らなかった。スロヴァキアの場合は，多民族統治体制を必要としなかった国家であることもあり，結果としてイデオロギーの取り込まれ方は，ソビエト連邦とは異なるものとなったと考えられる。

この章の冒頭で述べたことの繰り返しになるが，現在のスロヴァキアの「文化人類学」はこのような過程の上に成立しており，ポスト社会主義時代の事象を対象として研究を行うとしても，社会主義時代以前の文化人類学的研究の蓄積を客観化する作業は必要である。しかし，社会主義時代の研究の解釈は，現地の民族誌からもフィールドにおける調査からも，強いバイアスを通した形でしか遡ることができない。

社会主義時代の解釈とは，単に社会主義時代の民族誌をもういちどバイアスを抜いて書き直すことを意味するのではない。それは，現地の多くの研究者に自明のことである社会主義時代を，4.2で指摘したような反社会主義を超えて問い直す作業でもある。このような客観化する作業において，「外部」の人類学者による視点と「アト・ホーム（at home）」の人類学者による視点を接合することは，意味あるものとなると考えられる。

謝　辞

本論文の執筆で参照した現地語文献の多くは，松下国際財団研究助成，科学研究費補助金の支援による現地調査中に収集することができた。ここに記して感謝する。

注

1）本稿における文化人類学，民族学，民俗学の使い分けについては1.2で述べるが，本論文では歴史的な側面から論文を展開する便宜上，現在の文化人類学を形成してきた民俗学，民俗学などの隣接学問をも含めて，広い意味で「文化人類学」という語を使用している。しかし，ソビエト連邦における文化人類学的研究については「ソビエト民族学」という訳語が定着しているため，以降の文中においても文脈に関わらず，ソビエト民族学という語を用いる。

2）ただし，社会主義時代における大学の民俗学科の設置や，学術誌の創刊については触れられている（Horváthová 1995：21）。

3）事典名の直訳は『スロヴァキア民俗文化事典』であるが，執筆者はほとんど人類学者であり，スロヴァキア語の文化人類学事典に相当するものは，2007年現在これのみなので，本稿では文化人類学事典と訳した。

4）95年の事典がスロヴァキアの文化人類学分野において初めてのものであるため，以前との比較は不可能であるが，この事典に「マルクス主義的方法論」「階級」「集団農場」「マルクス＝レー

ニン主義」等の見出し語は存在しない。

5）ただし，スロヴァキアは，隣接するポーランド，ハンガリー，チェコと比較すると，社会主義から資本主義への移行期の社会変動をテーマとした英語の文化人類学研究は多くはない。参考までに，スロヴァキア人研究者の英語による論文が多く掲載された論集としては（Kiliánová 2003）が挙げられる。

6）1920年代からスロヴァキアの文化人類学の中心であるコメニウス大学では，民俗学の講義やゼミはあったが，１つの専攻として学生を受け入れ始めたのは1947年，１つの独立した学科（民族誌学・民俗芸能学：Katedra Etnografie a Folkloristiky）が設置されたのは1968年である（Michálek 1969：185-187）。スロヴァキアの大学と文化人類学については別稿（神原 2004）で触れたので，ここでの詳細な繰り返しは避ける。

7）同じく文化人類学事典において民俗（族）誌学は，「人々の物質的・精神的文化の起源とその発展についての歴史的，社会科学的に調査したもの」と記されている（Botík 1995a：125）。

8）マティツァ・スロヴェンスカーは当時，言語学／文学／歴史学／民俗学・地理学／法哲学／自然科学／産業／音楽の研究部会を持っていた。

9）著者は不明であるが『スロヴァキア博物館論集』創刊号の序文より。1896 K nášmu ukolu. *Sborník Muzeálnej slovenskej spoločnosti* 1（3/4）.

10）同様に『スロヴァキア博物館雑誌』においても，19世紀末から20世紀初頭においては，民俗学以外に考古学の論文，歴史資料の紹介などが掲載されている。

11）チェコにおける最初の文化人類学関係の雑誌の創刊は，スロヴァキアより早い1891年である。

12）スロヴァキアを対象とする文化人類学関連の研究論文が掲載されているチェコスロヴァキアで発行された雑誌については，【表１】に政治的背景を含め年表として整理した。

13）当時はチェコとスロヴァキアを合わせ地域示す単語として（Československý でなく）「Československý」が使用されていた。

14）ここに挙げた国名については，1898～1902年までの５年分の『スロヴァキア博物館雑誌』参照より。

15）1919年のマティツァ・スロヴェンスカーの研究部会は，言語学／文学／歴史／民俗学／教育学／芸術学／哲学／社会学／自然科学であった（Winkler 2003：216-268）

16）（3）と（4）については，これまであまり取り組まれてこなかったスロヴァキア民俗学の分野と考えることができる。

17）ただし，マルクスの資本の概念を民俗文化調査に取り入れることを試みたコバチェビチョヴァーの論考などいくつかの例外もある（Kovačevičová 1956）。

18）スロヴァキア語名に忠実に訳すと，会の名称は「スロヴァキア民俗学会」である。この組織は民俗学研究所に付随した組織であった。

19）この会報『民俗学報』（*Národopisné informacie*）もまた，現在まで続くスロヴァキアの代表的な文化人類学の雑誌である。

20）1989年の民主化革命以降，スロヴァキア政府がスロヴァキアの文化に関する研究を優先して援助することを決定したため，経済的な事情により，雑誌名は1993年に『スロヴァキア・スラブ民族学』（*Ethnologia Slovaca et Slavica*）と改称し，スロヴァキアを対象とした雑誌に方針を変更した。本文中で引用した（Podolák 1993）において，『スロヴァキア民族学』（*Ethonologia Slovaca*）の創刊から93年の改称までの経緯が記されている。

21）このプロジェクトの成果として出版された『スロヴァキア —— 文化のヨーロッパ的文脈』（*Slovensko: Európske kontexty ľudovej kultúry*）の序章には以下のような文章が記されている。

「『新』ヨーロッパ形成において，各民族の民俗文化はヨーロッパとしてのアイデンティティに統合され，ヨーロッパ文化の基礎となる・・・ヨーロッパのアイデンティティは，現在，当たり前のものとして考えられているスロヴァキアの様々な文化を認識することなしに理解できない。ヨーロッパアイデンティティおよび，ヨーロッパ文化の様式は，それぞれの形で表現される。スロヴァキアの文化の変容を捉え，それをヨーロッパの文脈に位置づけることがこのプロジェクトの目的である（Stoličná 2000：7-12）。」

22）社会主義時代の民俗芸能研究は音楽，歌，舞踊，造形芸術等それぞれ分野が細分化されており，総合的な研究に乏しかった（Kiliánová 2002：280）。

23）引用文献中で示された「民族芸能と政治との関係性」についての研究論文では，民族衣装や伝統的慣習などのイメージが政治的な文脈においてどう利用されるかについて研究されている（Krekovičová 1999）。

24）スラフコフスキーはその論文中で，具体的に論文とその筆者を挙げて批判していないが，この批判の一部は，明らかに社会主義時代の民族誌からの変革を目指す，彼に批判的な立場の研究にあてはまる。

25）チェコスロヴァキア時代であった1960年代後半の「プラハの春」の際には一時的に，西ヨーロッパの研究の成果などを取り入れることが可能であったが，1968年後の「正常化」時代以降は厳しく禁止され，特にチェコでは（西側の人類学者のように）非ヨーロッパ地域を研究する民俗学者が次々と亡命したという歴史的背景がある（Jeřábek 1992: 43）。本文では，人類学者間の対立を強調しているが，1989年以降のヨーロッパの学問の成果の導入は，地域研究的な意味でも，理論研究に関しても，すべての人類学者に等しく歓迎されていたことを前提として考えておきたい。

文　献

Bošková, E.

1961 Niekotoré poznatky zo života sezónných poľnohospodárskych robotníkov v oblasti Žiaru nad Hronom. *Slovenský národopis* 9, 420-432.

Botík, J. and P. Slovkoský（eds.）

1995a *Encyklopédia ľudovej kultury Slovenska I.* Bratislava:VEDA.

1995b *Encyklopédia ľudovej kultury Slovenska II.* Bratislava:VEDA.

Brouček, S.

1984 K Česko-Slovenským stýkum v národopise v první polovině devadesátých let 19. století. *Slovenský národopis* 32: 605-617.

Butusikova, A.

2003 Teaching and Learning in a New National Context: The Slovak Case. In Dorle Dracklé, Iain R. Edgar and Thomas K. Schippers（eds.）*Educational Histories of European Social Anthropology*, pp.69-81. New York, Oxford: Berghahn Books.

Černik, J.

1915 O sbiráni lidových písni. *Národopisný věstník Československý* 9: 244-255.

Chotek, K.

1924 Několik poznámek k národopisu Slovenska. *Národpisný věstník Československý* 17:

38–52.

Danglová, O.

1992 Roľnícka ekonomika vo svetle hodnotných postojov. *Slovenský národopis* 40: 243–251.

1995 Transformácia poľnohospodárstva ako otázník pre etnologa. *Slovenský národopis* 43: 487–493.

2003 "Dekollectivization" and Survival Strategies in Post-socialist Co-oprative Farmes. In Gabriela Kiliánová (ed.) *Communities in Transformation: Central and Eastern Europe* (Anthropological Jornal on European Cultures 12), pp. 31–56. Munster: Lit Verlag.

2006 *Slovenský vidiek: Bariéry a perspektívy rozvoja*. Bratislava: Ústav etnológie SAV.

Droppová, Ľ.

1966 K Problematike národopisného výskumu súčasnoti. *Slovenský národopis* 14: 594–600.

Dracklé, D., I. R. Edgar and T. K. Schippers

2003 Introduction. In Dorle Dracklé, Iain R. Edgar and Thomas K. Schippers (eds) *Educational Histories of European Social Anthropology*, pp. 1–6. New York, Oxford: Berghahn Books.

Ďurišová, M.

2006 My staviame trať, trať stavia nás. *Etnologické rozpravy* 2006 (2): 92–103.

Filová, B.

1977 Socialistická spoločnosť a národopisná veda. *Slovenský národopis* 25: 531–534.

Goddard, V. A., J. R. Llobera and C. Shore

1994 Introduction: The Anthropology of Europe. In Victoria A. Goddard, Josep R. Llobera and Cris Shore (eds) *The Anthropology of Europe: Identity and Boundaries in Conflict,* pp. 1–40. Oxford: Berg.

Húsek, J.

1925 O národopisné hranici mezi Moravou a Slovenskem. *Národpisný věstník Československý* 18: 90–116.

Horváthová, E.

1973 Hlavné smery a činnosť národopisného Ústavu SAV od založenia Slovenskej akadémie vied. *Slovenský národopis* 21: 169–181.

1995 *Úvod do etnológie: Vysokoškloské skripta Filozofická fakulta Univerzita Komenského.* Bratislava: Univerzita Komenského.

Jeřábek, R.

1992 Czech Studied of Folk Life from Ethnography to European Ethnology. *Anthropological Journal on European Culture* 1 (2): 37–51.

Kadlečik, D.

2006 K výskumu kolektivizácie poľnohospodárstva a fenoménu jednotných roľnických družstiev metódou orálnej histórie. *Etnologické rozpravy* 2006 (2): 134–141.

神原ゆうこ

2004 「自己表象の文化人類学――スロヴァキアにおける民主化後の文化人類学の模索」『九州人類学会報』31：20–26.

Kideckel, D. A.
1998 Utter Otherness: Western Anthropology and East European Political Economy. In Susan Parman (ed.) *Europe in the Anthropological Imagination,* pp. 134–147. Prentice Hall: Upper Saddle River.
Kiliánová, G.
2002 Etnológia na Slovensku na prahu 21. stročia: Reflexie a trendy. *Slovenský národopis* 50: 277–291.
2003 (ed.) *Communities in Transformation: Central and Eastern Europe* (Anthropological Jornal on European Cultures 12). Munster: Lit Verlag.
Kovačevičová, S.
1956 Význam Marxovho „kapitalu" pre skúmanie ľudovej kultúry na Slovensku. *Slovenský národopis* 4: 597–601.
1990 Úvod. In Božena Filová *Ethnografický atlas Slovenská*, p. x. Bratislava: VEDA.
Krekovičová, E.
1999 Politika o folklóre. *Slovenský národopis* 47: 5–18.
Leščák, M.
1969 Vážení kolegovia. *Národopisné informácie* 1969 (1): 3–5.
1980 K niektorým aspektom vývinu Slovenskej ľudovej kultúry po roku 1945. *Slovenský* národopis 28: 365–371.
1991 Začiatok Užitočiných Dialógov? *Slovenský národopis* 39: 67–75.
1995 Kolektivizácia poľnohospodárstva a súčasný etnologický výskum. *Slovenský národopos* 43: 378–382.
Melicherčík, A.
1946 Etnografia ako veda. *Národopisný sborník* 6/7: 1–13.
1950 Československá etnografia a niektoré jej úlohy pri výstavebe socializmu. *Národopisný sborník* 9: 25–36.
Michálek, J.
1969 Národopis na Univerzite Komenského. *Slovenský národopis* 17, 185–191.
1998 *Dejiny etnografie a folkloristiky.* Bratislava: Filozofická fakulta Univerzity Komenského.
Nahodil, O.
1953 O programu nového etnografisckého časopisu. *Československá etnografie* 1: 1–3.
1955 Deset let československé etnografie (1945–1955). *Československá etnografie* 3: 111–124.
Nováková, K.
2006 Kolektivizácia a jej dopad na vinohradníkov v orešianskom mikroregióne. *Etnologické rozpravy* 2006 (2): 62–80.
O'Dowd, L. and T. M. Wilson
1996 Frontiers of Sovereignty in New Europe. In Liam O'Dowd and Thomas M. Wilson (eds) *Border, Nations and States,* pp. 1–18. Aldershot: Avebury.
Ondrejka, K.
2003 *Malý lexikón ľudovej kultúry Slvoenska.* Bratislava: Mapa Slovakia.

Podoba, J.
1996 Niekoľko poznámok k diskontinuitám vo vývoji slovenského poľnohospodárstva a etnologického myslenia. *Slovenský národopis* 44: 212–224.
Podolák, J.
1993 Preface. *Ethnologia Slovaca et Slavica* 26/27: 7–9.
1998 Obnovenie Národopisného zborníka Matice slovenskej. *Národopisný zborník* 12: 7–9.
Polonec, A.
1943 Tovorcovia národopisného oddelenia Slovenského národoného múzea. *Národopisný sborník* 4: 65–71.
Pranda, A.
1970 Niektoré teoritické otázky štúdia ľudovej kultúry v súčasnosti. *Slovenský národopis* 18: 39–60.
1973 Informáciám Slovenskej národopisnej spoločinosti na cestu. *Národopisné informácie* 1973（1/2）: 2–6.
Ratica, D.（ed.）
1991 *Kontinuita a konflikty hodnôt každodenne kultúry*. Bratislava: Národopisný ústav SAV.
1992 *Zmeny v hodnotových systémoch v kontexte každodennej kultúry*. Bratislva: Národopisný ústav SAV.
Segľová, L.
2006 Školské slávnosti jedného socialistického gymnázia. *Etnologické rozpravy* 2006（2）: 28–61.
Slavkovský, P.
1993a História jedného družstva. *Slovenský národopis* 41: 69–79.
1993b Agrárna kultúra a životné prostredie. *Slovenský nárosopis* 41: 423–447.
1995 Dve diskontinuity vo vývine slovenského poľnohospodárstva. *Slovenský národopis* 43: 371–377.
1996 Dve diskontinuty a štýl diskusie. *Slovenský národopis* 44: 480–483.
2006 Vedecké syntézy druhej polovice 20. stročia: Výzvy i limity. *Etnologické rozpravy* 2006（1）: 16–29.
Šrámková, M.
2003 Slovesná folkloristika v pedesáti ročnících Slovenského národopis. *Slovenský národopis* 51: 215–228.
Stololičná, R.
1994 Ľudová kultúra slovenska ako súčasť európskej kultúrnej identity: Zásadné kontexty výrazu. *Slovenský národopis* 42: 402–412
2000 Úvod. In Rastislava Stololičná（ed.）*Slovensko: Európske kontexty ľudovej kultúry,* pp. 7–12. Bratslava: VEDA.
高倉浩樹
2003 「民族文化と公共の記憶の布置 ── サハにおける馬乳酒祭と駒繋ぎ」瀬川昌久編『文化のディスプレイ ── 東北アジア諸社会における博物館，観光，そして民族，文化の再編』（アジア研究報告シリーズ４）pp. 69–118，東京：風響社。

トーカレフ，S. アレクサンドロビッチ
1970 『ソビエト民族学入門』大木伸一訳，東京：弘文堂（初出は1968年）。
Urbancová,V.
1979a K zameraniu slovenskej etnografie v rokoch 1946–1977. *Slovenský národopis* 27: 103–125.
1979b Vzájomné vzťahy Čechov a Slovákov v období národoného obrodenia a ich odraz v slovenskej etnografii. *Slovenský národopis* 27: 537–552.
1987 *Slovenská etnografia v* 19. *storočia*. Martin: Matica Slovenská.
Vanovičová, Z.
2006 Časopis *Slovenský národopis* v Ústave etnológie Slovenskej akademie vied. *Etnologické rozpravy* 2006（1）: 117–119.
Vermeulen, H. F. and A. A. Roldán
1995 Introduction: The History of Anthropology and Europe. In Han F. Vermeulen and Arturo Alvarez Roldán（eds）*Fieldwork and Footnotes: Studies in the History of European Anthropology*, pp.1–18. London: Routlede.
渡邊日日
1999 「ソヴィエト民族文化の形成とその効果――「民族」学的知識から知識の人類学へ」『旧ソ連・東欧諸国の20世紀文化を考える』（スラブ研究センター研究報告シリーズ64）pp.1–31，札幌：北海道大学スラブ研究センター。
Winkler, T. and M. Eliáš
2003 *Matica slovenská: Dejiny a prítomnosť*. Martin: Matica slovenská.